

jīvanmukti 以後

伊 藤 道 哉

生きながらの解脱 (jīvanmukti = **jm**, 生身解脱) を達成した後身体を保持する原因について、不二一元論学派では saṃskāra 説と avidyāleśa 説という少なくとも二つの学説が行なわれたことを明らかにし、avidyāleśa 説が無知 (avidyā) 論の展開と密接にかかわっていたことを指適するのが本稿の目的である。

ところで、業 (karman) と解脱との関係であるが、未だ果報を生じる作用を開始していない業 (anārabdhakarman) が減する原因は真実の知 (tattvajñāna) であり、一方、すでに果報を生じ始めてしまった業 (prārabdhakarman) が減する原因は、その果報の享受 (bhoga) 以外にない。知といえども prārabdhakarman の自動運動を妨げることはできないのである。しかし、それを享受する間は悟った人も身体を保持でき、したがって **jm** が可能となるわけである。以上のような業減と解脱の一般原則は比較的多くの支持をうけていたらしい¹⁾。

さて、悟りを開いた後でも、何らかのかたちで無知の影響があるという点で、Śaṅkara をはじめとする不二一元論学派の多くの学匠は一致しているようだが、avidyā そのものが残っているのか、それとも、saṃskāra が残っているのかについては学説の相違があったらしい。本稿では仮に、**jm** 以後も無知の痕跡が残留するという説を avidyāleśa (= **al**) 説、一方、無知は根絶され、saṃskāra (= **s**, 身心の機能を維持する力) だけが残るという説を **s** 説と呼んで、学説の展開をみていく。

Śaṅkara (= **ś**) は **jm** 以後の身心の活動の原因を **s** にもとめる一方、様々な思い違いや誤った判断等の原因を無知の **s** にもとめていたようである。**ś** は次のように述べる。「しかし、除去されても誤った知が二つの月の知のように、**s** によってある期間存続する場合がある。」²⁾ 「身体の崩壊までの間は、(身体を生成した業は) 報いを楽しむ手段として、誤った観念や激しい欲望等の過失を、その間に限ってだけ生じる場合がある。たとえば放たれた矢のように。…中略…しかし、ある場合は、知以前にすでに生じていた誤った観念から発生した **s** によって、誤った観念のあらわれである様々の記憶が生じてくると、それらは誤った観念による混乱を突然引起こす。ちょうど方角の区別を熟知していても、突然、方角をま

ちがえたかな? という混乱が生じるようにである。』³⁾ Ś にあっては、無知は附託 (adhyāsa) であり、一種の心理上の誤りにしかすぎないので、それが悟りの後まで力を奮ってはこまるわけで、s に依らざるをえないということになるのであろう。

次に, Maṇḍanamīśra (=M) であるが、彼は徹底して S 説をとったようである。「たとえば、縄に対して蛇を附託させることから発生した恐怖心が生じてくると、震え等のはじまるが、真実を見ることによって恐怖心が除かれると、ある人の場合には、まさにその時点で (震えは) 止まる。ある人の場合は、その恐怖心の s によって、ある程度の時間 (震えが) 続く。それと同様に、すべての業が消滅しても、報いをうけつつある業の s が持続するから、身体の存続がある。ちょうど、陶工が作業をやめても、轆轤が回転し続けるように。…それから、無知が停止し、しかも業は、結果をすでに生じている業も結果を未だ生じていない業も等しく停止しているのに、報いを生じはじめた業の s があると、単なる思い込みによって、知者ですら、このアートマンを身体を有するものであるかのように、或いは享受者であるかのように錯覚する。』⁴⁾ 以上、M によると、悟りを開いた後、死ぬまで身心の活動が持続するのは、すでに作用をあらわした業の s によるのである。しかも、悟った時点で、無知のみならず業すらも無くなってしまっているのだから、真実を悟った後では、業の報いをうけるということ自体、単なる思い込みによるイメージ (ābhāsamātra) にしかすぎない。M は、揺ぎ無い叡知ある方 (sthitaprajña) すなわち jīvanmukta の特徴を記述した *Bhagavadgītā* の一節を引用した後で、「身体等の現象は夢であるとみなされるにすぎない。なぜなら、それとの接触はないので、実在しないのと同じなのだからだ。』⁵⁾ と述べる。つまり、s が悟った人に身体のイメージを引起す限りで jm が成り立つと M は考えていたのであろう。Ś, M 以後も s 説は行なわれ、Sureśvara⁶⁾ や Padmapāda⁷⁾ もそれを支持していたようである。

さて、彼ら以後無知論に展開があり、avidyā は確実に力をつけ、マイナス面を残しながらも積極的な能力を有する存在へと高められていったらしい。とりわけ、Sarvajñātman (=Sa) が画期的であったことが知られている。Sa にあっては、avidyā = māyā であり、積極的な存在性 (bhāvarūpa) を有し、さらに, āvaraṇaśakti (=āś, アートマンを覆い隠す力) と vikṣepaśakti (=vś, アートマンを現象界に展開させる力) という二つの能力を持つ存在である⁸⁾。ところで、この vś, つまり avidyā のイメージ構成能力が al 説とかかわっているように考えられる。

Sa は Vimuktātman (=V) とともに, **jm** を無知の痕跡にもとめる。「生きながらの解脱の営みを成り立たせるものが無知の痕跡, くさみ等と言われているが, それは(ただの)無知でもなければ, その一部分でもない。なぜなら, そのような見方とその完全な解脱とは相容れないからだ。Bhāṣyakāra (=Ś) の学術書について, 初めから終わりまで内容を検討してみると, 悟りの知恵によって除かれた無知そのものによるイメージが, くさみ, 翳り, 痕跡, サンスカーラと述べられていると理解せざるをえない。まず, 直観知により **jm** がある。しかし, その境地にも, ものを二つにみる翳りがある。なぜなら直接知覚されるからである。無知の痕跡は, ものを二つにみることを守るためにある。そのことについては, 自らの直接体験が認識根拠である。悟る前には, アートマン=ブラフマンということにベールがかかっていたが, 悟りが生じると無知のベールは除かれた。たとえそのようでも, ものを二つにみることの痕跡の存続が直接知覚されるのだから, 無知の痕跡も認められねばならない。」⁹⁾ 以上, **Sa** の言わんとすることは, **jm** を成立させるものは様々な名称で呼ばれるけれども, 結局は無知自体のイメージ能力であり, それがあるからこそ, 悟った後でも, AかBかという二元的な判断ができる, ということであろう。Madhusūdana-sarasvatī (=Ms) は, 「イメージをつくり出し展開させる能力を持った無知の一部分が leśa ということばの中身である。」¹⁰⁾と註解しているが, これがあるからこそ, 悟りを開いた後の活き活きとした日常生活が可能となるのであろう。

次に, **s** 説をきっぱりと否定し, 無知の痕跡こそが **jm** を成立させると明確に主張したのが **V** である。「なぜなら, 無知がなければ **s** もないからだ。つまり, **s** もその影響をうけるものも, とともに無知を本体としているからだ。…しかも, 蛇だという思い違いは, 縄に対する無知を本体としているが, それは無知がなくなると, 再び生じることは決してない。仮に再び生じることがあるとしても, 無知そのものから生じるのであって, **s** から生じるはずがない。…こうだから, 無知の痕跡だけから, かのブラフマンを悟った人に, 肉体等のイメージがあらわれると認めるべきである。」¹¹⁾ このように, **V** は **s** 説を斥け, **al** の本質に迫る。「以上のような理由から, 知者にも, 作用を開始した業の享受が残っているという単なるイメージを発生させる能力のある無知の痕跡を認めるのに何ら過失はない, という思いが自分にわいてきたというのなら, その思いは極めて正しいね。私も全くそのとおりだと認める。しかし, 別の肉体等の輪廻のもとに他ならぬ無知の痕跡が知者にあるとは, 私は認めないね。」¹²⁾ このように **V** は, 輪廻の原因とな

る無知は一掃されても、悟った人に肉体等のイメージを思い浮かべさせる能力をもった無知が残存すると考えていたらしい。

時代は下るが、Madhusūdana-sarasvatī は、avidyā の śakti と māyā の leśa を同一視して、①この世界は真実在である、②真実在ではないが、実生活上同じ作用をもつ、③現象世界は、ありありと眼に見えるものであり、かつ、実質的な作用を持つものである、以上3つのイメージを産み出す能力が無知に備わっているとしている¹³⁾。しかも、③の二元対立の世界をありありと眼に見える存在として映像化し、かつ、実質的な機能を持っているかのように感じさせる無知のイメージ構成能力は、悟りによっても損われることなく機能し続けるのである¹⁴⁾、とする。

以上、**Sa**, **V**, **Ms** は等しく **al** 説を支持したと思われる。また、**al** の中身はどうやら無知のイメージ展開能力 (**vś**) であるらしい。それが **jm** 以後も機能し続けるから、二元対立の現実世界が再び展開して、乞食、遊行等の活動や、様々の分析的な判断が可能となるのであろう。むしろ **al** を考え出すにいたった動機も、悟りをどうやって現実に適応させるかという、極めてプラクティカルな問題にかかわっていると思われる。**s** 説から **al** 説への展開は無知論の進展と密接に結びついているが、学匠相互の関係については今後を期すこととする。

- 1) 古くは *Samkhyakārikā* 67, *Brahmasūtra* IV. 1. 15, 19, *Padārthadharmasamgraha* (*Viz SS* 6) p. 281, 下って、*Mañikāṇa* (*Adyar LS* 88) p. 60 等。
- 2) *Brahmasūtrabhāṣya* IV. 1. 15 (*NSP* 1938) pp. 958¹²-959¹.
- 3) *Bṛhadāraṇyakoṇiṣadbhāṣya* I. 4. 10 (*An SS* 15) p. 173²¹⁻²², p. 175⁴⁻⁶.
- 4) *Brahmasiddhi* (*MGOS* 4) p. 131²⁻⁶, p. 131¹⁶⁻¹⁸.
- 5) *ibid.*, p. 133²⁰⁻²¹.
- 6) *Naiṣkarmyasiddhi* (*BSPS* 38) p. 199⁸⁻⁴.
- 7) *Pañcapādikā* (*Viz SS* 2-1) p. 174⁸⁻⁶. (*CSS* 1-1) pp. 513⁵-515².
- 8) 前田専学『ヴェーダーンタの哲学』(サーラ叢書 24) 平楽寺書店 pp. 249-250.
- 9) *Samkṣepaśārīraka* 4. 41-44 (*Madras University Philosophical Ser.* 18) pp. 535-536.
- 10) *Sārasamgraha* ad *Samkṣepaśārīraka* 4. 43 (*KSS* 18-2) p. 384¹.
- 11) *Iṣṭasiddhi* (*GOS* 65) p. 76¹²⁻²⁰.
- 12) *ibid.*, p. 77⁶⁻¹⁰.
- 13) *Advaitasiddhi* (*NSP* 1937) p. 891²⁻⁵. cf. *Sārasamgraha* ad *Samkṣepaśārīraka* 4. 46 p. 385¹⁷⁻²¹.
- 14) *aparokṣapratibhāsayogyathārthābhasajanikāyāḥ śakteranuvṛtteḥ tadvatī avidyāpi tiṣṭhatyeva. Advaitasiddhi* p. 891⁴⁻⁵.

(東北大学大学院)